

第 16 回目 新しいひとりの人(One New Man)

【聖書箇所】【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 2 章 11～18 節

- 11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、
- 12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。
- 13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。
- 14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、
- 15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、
- 16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。
- 17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。
- 18 私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。

●特に、2 章 15 節の後半

【新改訳改訂第 3 版】このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

(ネストレ 26 版)

ἵνα τοὺς δύο κτίση ἐν αὐτῷ εἰς ἓνα καινὸν ἄνθρωπον ποιῶν εἰρήνην,

(ネストレ 27 版)

ἵνα τοὺς δύο κτίση ἐν ἑαυτῷ εἰς ἓνα καινὸν ἄνθρωπον ποιῶν εἰρήνην--

※白畑氏の逐語訳(ネストレ 27 版)―「それは、二つのものを、自分自身によって(ἐν ἑαυτῷ)、平和を造り続ける新しいひとりの人へと創造するためです。」

はじめに

●「新しいひとりの人」(One New Man)―このことばが意味するのは、エペソ人への手紙の中心的なテーマを一言で表している、とても重要なキーワードであるということです。前回、2 章 10 節の「私たちは神の作品」であるということについて触れました。そのことばが意味することは、神が私たちをある目的をもって、私たちをキリストにあって造られたということです。もう一度、10 節のみことばを読んでみたいと思います。

אגרת שאול אל האפסים

「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエス にあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、 その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」

●ここで神がどのような目的で私たちを造られたのかが記されています。その目的とは、私たちが「良い行ないをするため」、あるいは「良い行ないに歩むように」、しかも、その「良い行ない」ができるように、その力や知恵をあらかじめ備えて下さっていると。この最後の「あらかじめ備えてくださった」とあるということは、この「良い行ない」をする上で、あなたが特別に自分で頑張ったり、自分の努力でしようとしたりすることは必要ないということです。この目的を実現させていくためのすべての力は、すでに神が備えて下さっていると約束しています。どこに備えられているのかと言いますと、それは「天の所」です。ですから、私たちがすべきことはその天の所に「座ること」です。座ることで、はじめて「歩み」ができ、敵に対しても「立つ」ことができるのです。そうした前提をもって、「良い行ない」がどういうものかについて考えてみるなら、「良い行ない」とは「キリストのからだを建て上げる」という一言に尽きます。このキリストのからだを建て上げるという目的は、神の夢であり、ヴィジョンです。その目的を実現すべく、私たちが選ばれたのです。これは長い間、隠されてきた奥義(神の秘密)なのです。誰に対して隠されてきたのかと言いますと、それは神に選ばれた民、すなわちイスラエルの民(ユダヤ人)に対してです。その彼らが、キリストによって、神のみこころの奥義が示されるようになった。その奥義をパウロはこのエペソの手紙では次のように表現しました。

【新改訳改訂第3版】エペソ1章9～10節

9 **みこころの奥義**を私たちに知らせてくださいました。それは、この方において神があらかじめお立てになったみむねによることであり、

10 時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにおいて、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。

●「いっさいのものが、キリストにおいて一つに集められる」こと、これを別の表現にするならば(パウロという人は、「あること」を説明するのに、様々な表現を用いる天才だということを念頭に置いてください。実は、このことが分かると一本の筋が見えてくるのです)、1章22～23節になります。

【新改訳改訂第3版】エペソ1章22～23節

22 また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

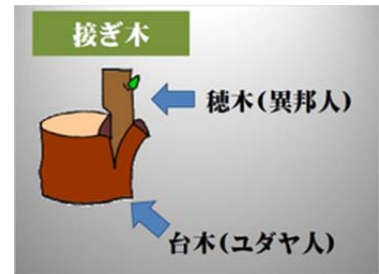
23 教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

●キリストをかしらとするキリストのからだ、つまり、教会こそ神の作品なのです。その神の作品であるキリストのからだなる教会は、神に選ばれたイスラエル(ユダヤ人)とそれに接ぎ木された異邦人によって構成されるといふ新しい神の作品を「新しいひとりの人」ということばで表そうとしているのです。

1. 二千年間、見失われていた奥義としての「新しいひとりの人」

●ところで、このパウロが記した「新しいひとりの人」という概念は、キリスト教の歴史において、約二千年間、隠され続けてきた奥儀なのです。すでに使徒のパウロには開かれていましたが、その後、この真理は見失われたのです。この「新しいひとりの人」という真理が再びクローズアップされたのは、イスラエルの国が建国された1948年以降のことです。つまり、教会がキリストにあって、キリストの花嫁として完成されるためには、イスラエルの民が約束の地において、国家的、霊的再生を遂げることはあり得ないということなのです。

●二千年にわたって、キリスト教会はユダヤ人たちを迫害してきました。ユダヤ人はメシアであるイエスを十字架につけた罪によって神から見捨てられ、自分たち教会が彼らに代わってその役割を与えられたと考えてきたのです。ところが、そうした考えが間違っていたことを、神は20世紀において示され始めたのです。その画期的な出来事がイスラエルの建国でした。イスラエルの国が再建されたのです。そしてユダヤ人たちの中から、イエスがメシア、すなわちイエスが救い主であると信じる者たちが少しずつ起こされ始めたのです。彼らをメシアニック・ジューと言います。現在のイスラエルにおいてはメシアニックの数は約一万人前後だと言われていますが、ユダヤ人がイエスをメシアと信じることなくして、キリストのからだとしての教会は完成しないのです。つまり神のヴィジョン、神の夢は実現しないのです。



●私たち日本人にとってユダヤ人の存在はこれまで遠いものでしたが、今や、きわめて重要な存在なのです。なぜなら、私たちは彼らに接ぎ木された存在だからです。接ぎ木の絵にあるように、本来は、私たち異邦人がイスラエルに接ぎ木されたのです。私たちが持っている聖書は旧約聖書と新約聖書とから成っています。旧約とは古い契約のことで、新約とは新しい契約のことです。神と神によって選ばれたイスラエルの民との約束です。私たち異邦人にとっては、新しい契約というよりは初めて与えられた唯一の契約です。本来、旧約、新約という概念はイスラエルの民(ユダヤ人)たちに対してなされたものです。ユダヤ人にとってのみ新しい契約だったのです。



●教会は、歴史のある時点においては一つの民族、ユダヤ人から誕生し、初代教会は基本的にはすべてその構成員はユダヤ人でした。私たちの主イエス・キリストもユダヤ人でしたし、教会のリーダーである使徒たち、弟子たちもユダヤ人でした。新約聖書を書いた者たちの多くもユダヤ人であったことを忘れてはなりません。教会はイスラエルという土壌で発芽し、花開いたのです。キリストの福音が世界に広がる土台となったのも彼らイスラエルの民、すなわちユダヤ人なのです。彼らに与えられた神の永遠の契約—その契約に私たち異邦人が接ぎ木されたので、その結果、世界中の諸民族が神に受け入れられるようになったのです。どのように接ぎ木がなされたのかと言えば、それはイエス・キリストの福音によってです。つまり御子イエスが十字架によって罪の贖いをなし、よみがえられ、天の所に着座されたことによってです。このイエスの出来事によって、私たち異邦人もユダヤ人に対して与えられていた神の契約に接ぎ木されることができたのです。エペソ書3章6節によればこうあり

ます。

その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」

これこそが神の新しい作品である「新しいひとりの人」のヴィジョンなのです。

2. 接ぎ木される以前の異邦人の姿

●ここで、接ぎ木される以前と以後の異邦人の姿について、2章11節以降を見てみましょう。

11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、

12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人 たちでした。

13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。

14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、15 二つのものをご自身において新し いひとりの人に造り上げて、平和を実現 するため・・・なのです。

18 私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。

19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、今は聖徒たちと同じ国民であり、神の家族なのです。

●ここでこれまでのことを「キリストの救いの諸相」として整理してみたいと思います。

(1) 2章1～7節

霊的に死んでいた私たちが、キリストとともに「生かされ」「よみがえらされ」「天の所に座らされている」こと。

(2) 2章8～10節

私たちが、良い行いをするための神の作品として造られたこと(再創造されたこと)。「良い行い」とはキリストのからだを建て上げること。

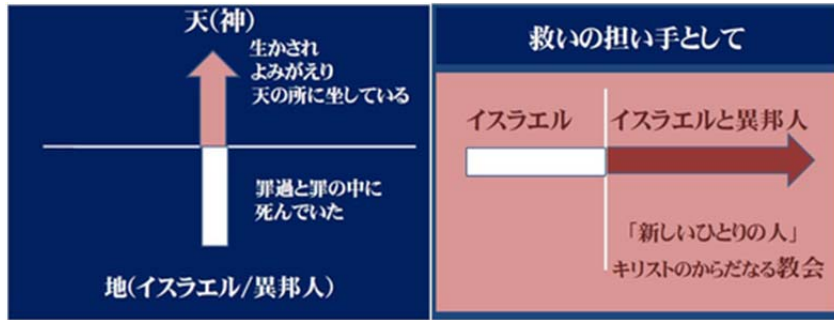
(3) 2章11～15節

肉において異邦人(キリストから離れ、除外され、望みもなく、神もない者)であった私たちが、キリストによって、「近い者とされた」つまり、接ぎ木された者となったこと。

(4) 2章15～16節

ユダヤ人と異邦人をキリストにおいて、「新しいひとりの人」に造り上げて、平和を実現すること。つまり、ユダヤ人と異邦人がともにひとつのからだとなるということ。これは「奥義」だったということ。

אגרת שאול אל האפסים



3. 「新しいひとりの人」を実現するために私たちがなすべきこと

(1) ユダヤ人が救われるために祈ること

●ホーリネス教団の中田重治監督がしたことは、イスラエルの建国などだれもが信じていなかった時代に、やがてユダヤ人がイスラエルに帰還するという神の約束を信じて、彼らの救いのために祈ったことです。彼はヨハネの黙示録7章を通して、日本のクリスチャンがなすべきことは、ユダヤ人の救いのために祈ることであると確信しました。日本の民の救いのための働きとイスラエルの民のそれとは、車の両輪の関係にあることを正しく理解することです。

(2) 自分のうちにあるさまざまな敵意を廃棄して、平和の絆を保つこと

●ユダヤ人と異邦人との間にある「敵意」は、私たちが想像する以上のものです。この敵意(隔ての壁)は、救いの担い手としてアブラハムが神に選ばれた時から始まっていました。

<敵意の象徴>

- ① 神殿にある異邦人の庭(事実上の立ち入り禁止の区域の存在を示している)
- ② 律法の存在
- ③ 土地をめぐる戦い
- ④ 迫害によるトラウマ

●ユダヤ人と異邦人との間にある敵意は、この世に存在するあらゆる分裂の「根」です。そしてこれは今も存在しています。現代のイスラムのテロ活動もここに起因します。テロは、イスラエルを支援する国に対するイスラムの戦いです。私たちのうちにもさまざまな隔ての壁が存在します。その壁をキリストによって打ち壊される必要があります。その壁は自分が正しいと思っていることであることが多いのです。私たちの善悪の基準、嗜好、文化、習慣などの隔ての壁が、キリストにあって打ち壊されるならば、平和がそこに生まれます。私たちは平和を築くために存在しているのです。